



岐阜県本部だより

japanese government approved non-profit-organization (npo) japan karate shotorenmei

HP: <http://www.fsnet.or.jp/~jks-gifu/>

発行: NPO法人日本空手松涛連盟岐阜県本部

発行責任者: 岐阜県本部広報部

岐阜県岐阜市森東96番地 tel(058)-229-6066

岐阜県瑞穂市別府 1214 tel(058)326-5512

浅井哲彦首席師範 逝去



八月十五日午後二時五十分、我がNPO法人日本空手松涛連盟首席師範 浅井哲彦師範が永眠されました(享年71歳)。空手会の最後の重鎮とも言われ、世界でもカリスマとして多くの門下を育ててこられました。病に倒れても尚、毎日の稽古を欠かさず、先述の7月29日の全国大会にも眼光鋭く、会場にて試合を観戦しておられました。9月1日送り雨の中、東京護国寺において執り行われた葬儀・告別式には、日本全国から空手会をはじめ政財界、芸能界の関係者。またヨーロッパ、アジア、各地から、そして岐阜県本部からも多くの支部長が参列し、最後の別れを惜しんだ。浅井首席師範のご冥福を心からお祈り申し上げます。

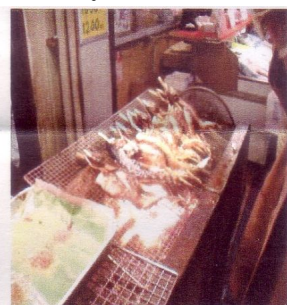
上半期大会ハイライト

第7回 東海北信越地区空手道選手権大会

平成18年6月25日、午前8時。敦賀インターチェンジを降りる。行き交う車に目をやると、真っ白な空手衣を着た少年拳士達が、緊張した面持ちでちょこんと座っている。追い越していくバスを見て「あっ、あの子！前に対戦した静岡の子や！」「あっ、あの子知ってる！」会場となる敦賀市総合体育館に近付くにつれ、その声は昂ぶっていった。海無し県である我々岐阜県人にとって、日本海に面した福井県へはリゾート地として訪れる機会が多い。がしかし、今日ここに集まった彼らの体からはそれとは違うものを感じる。選手の体から感じるもの、それはまさしく「気塊」。午前8時、開門。その「気塊」はまだぶつかりあう事無く、静かに静かに会場内へと流れて行った。

東海北信越地区空手道選手権大会、いよいよ開始の時刻となった。選手権のハイレベルな試合は言うまでも無いが、この大会を主催した福井県本部の見事なまでの運営。恐らく西井本部長のもと、幾度も打ち合わせを重ねてこられた事であろう。細部にわたっての選手に、審判に、そして観覧者に対する心遣いからそれらを感じ取ることが出来た。選手や審判がより良い環境で試合に挑めること、これが一番大切なことであるがそういった面でこの大会の評価は非常に高いものであった。

試合は確かに岐阜県選手の活躍も素晴らしいものであったが、『東海北信越地区のレベルがここ数年で確実に上がってきている』と言うのが多くの先生方の感想である。大会に出ることで得られる様々な感情。勝って、負けて、刺激し合い、高め合う選手達。しかし刺激を受けるのは選手ばかりではない。大会会場では中立公平でなければならない審判員という立場上、感情を顔にも出せない、声にも出せない指導者達。計り知れない時間を費やし、我が子のように情熱を注いできた門下生の涙に、新たな決意を胸にする。大会というものには指導者も、多くの刺激を受ける機会なのである。熱い、熱い、本当に熱い戦いは、絶頂の歓声とともに終焉の時を迎えた。



会場を後にする選手たちは、他県の選手たちと7月末の全国大会での再会を約束し、帰途についた。予定よりもスムーズに大会が終了し時間が空いたため、敦賀市内の「おさかな市場」へ寄ってみた。すると『ここでもまた大会が始まるのか?』と思うほどの各県出場選手達が、日本海の幸にほっぺたを落としていた。先ほどまでのみなぎる闘志は何处へ、選手達が子供本来の無邪気な笑顔に戻っていく姿が印象的だった。さて、ここで熱気を醸し出したのは応援に来ていたご父兄たち。市場でのお刺身値切り合戦は、子供たちの「気」を超えていたかもしれません。店主との「気」と「気」のぶつかり合い。果たして勝者は...空手道を通じて、色々な土地を巡り、色々な人々に出会い、色々な名産品を食す。これも一つの、空手道の楽しみ方なのでしょう。



～ 新刊のご案内 ～

松涛連盟 香川師範による解説書第二弾。全日本トップ選手の模範演技を収録した100分のDVD付が発売されました。前回の本も非常にわかりやすく、初心者バイブルとなりましたが、今回の本は四大流派に視野を広げた構成となっています。空手の基本技をしっかりと身につけて、レベルアップする秘訣をアドバイス。立ち方・突き・蹴り・受け・移動基本動作・組手・形など、基本&上達ポイントを映像と連続写真で徹底解説。必携の一冊です。

著者: 香川 政夫[著] B5判 160P 出版: 永岡書店 定価: 1575円(5%税込)

第7回 全国空手道選手権大会



ズンズンと地鳴りの如く鳴り響く勇者の行進。体は小さくとも、自信に満ち溢れた強者達。この日、この瞬間を待ちわびた拳士達。脅えや、戸惑いは欠片も感じられない。見据えた眼のその先に映るもの…平成 18 年 7 月 29、30 日。東京有明コロシアムで行われた第 7 回 NPO 法人日本空手松涛連盟全国空手道選手権大会・全国車椅子空手道選手権大会・全国小中高空手道選手権大会。全国各地から選拔を受けた幼児から大人まで約 1000 名が日頃の練習の成果を發揮した。

試合が進むにつれヒートアップする観客席。声援と、歓喜と、涙が一緒になり、我が子の勝利を一心に祈る。期待に応えようと実力以上のものを発揮する選手。しかしここは全国大会。各地から選抜された自信に満ち溢れた選手の集う場所。実力だけでは簡単に勝ち進むことは出来ない。全国大会という分厚い壁を思い知る。

至極の技が、気迫が観衆をも魅了する

どの選手も、とてつもなく強い、見惚れるほど上手い、目を疑うほど速い、全てを打ち砕くほど重い、風を切るほど鋭い。まさしく至極の技。日本一を決めるその場所に、今自分もいる。試合の順番が近付き震える体、怖いのか？緊張なのか？自分に問いかける。ここまで来て「絶対勝つんだ」という気持ちと「勝てっこない」という気持ちが葛藤する。頂点を目指した試合はたくさんのドラマを生み出した。



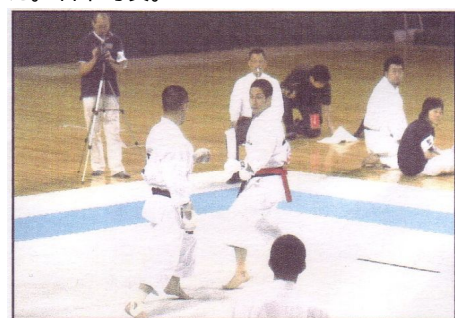
先に行われた東海北信越地区大会で拳を交えた仲間達と再会を果たす。試合前は言葉少なに挨拶を交わす程度であったが、試合が進むにつれ、県の内外を問わず応援につく選手が増えてきた。岐阜県選手に声援をくれる静岡県選手、愛知県選手に駆け寄る長野県選手。そして決勝戦後に握手を交わす岐阜県と福井県の選手と監督。空手を介した人と人の輪は回を重ねるごとに大きくなっていく。小・中学生の、今はまだ他県の遠学の空手部などで同じ汗を流す仲間になるかもしれない。空手道は果てしないがあり、時には手を差し伸べ、時には支えられ、時には肩を並べて歩くこともあるだろう。全国大会は日本の広さを知る絶好の機会であり、同じ空手道を歩むたくさんの友とたった一つの目標に向かって我武者羅に打ち込める1年に一度の貴重な瞬間でもある。

[illegible]

少年大会に続いて行われた一般部、および車椅子の大会。観衆の眼差しと吐息を集めたのが、WKF 世界王者であり、全空連王者の永木伸児選手（本部研修生）左下写真。永木選手の試合を見ようと、会場には多くの少年選手も居残った。期待を裏切らない、期待以上の試合運びと華麗な技を見せ、貫禄の組手、型の二冠を達成した。

相手選手の攻撃をことごとくかわした永木選手であったが、試合後は子供達に怒涛のサイン攻めにあうことになる。それらに笑顔で受け応える世界王者。後に続く松涛連盟の子供達の為に、試合で、試合以外で彼の残した功績は非常に大きい。

また車椅子大会では、我らが岐阜県を代表する大西尚子選手が、不動の4連覇を成し遂げた。また大西選手は個人型においても浅井首席師範直伝の「浪手」を演武し、優勝の栄冠に輝いた。また団体組手の部でも中京学院大学が強豪帝京大学を破り、念願の優勝を手にした。右下写真。



中京学院チーム：園原師範(下段中央)：大西選手(右端)

頂点はやはり高かった。全国という壁は厚かった。しかし、この桧舞台に立った経験はとても大きな自信として、それぞれの空手道に、そして人生にいかしていけるだろう。「終わりは始まり。」不甲斐なかった試合も、入賞という栄光も、もう過ぎた事。既に時は刻一刻と平成 19 年の全国大会へと動き出している。*試合・結果詳細は「月刊空手道」10月号に掲載されています。

.....

お詫び

ご愛読いただいております「岐阜県本部だより」ですが、広報部の都合により一部発行が滞っておりました事、お詫び申し上げます。今後は更に広い視野で、更に細かな視点で、会員の皆様にお伝えしていきたいと思っております。是非とも皆様の身近であったニュース、感想など広報部までお寄せ下さい。今後とも「岐阜県本部便り」のご愛読をお願い申し上げます。